

鳥執の件



吉川経幹は家譜編纂を開始し、自らも文書の書写を行っておりました。

家譜は歴代当主の通史なのですが、「鳥執の件」があります。

これは、鳥取城の戦いのことで、天正九年(一五八二)、羽柴秀吉による大規模な兵糧攻めにより、城内の深刻な食糧不足による籠城の人々の苦しみを見て、城督の吉川経家は降伏し、城は開城、自身は自刃します。

経家は、現在の島根県大田市にあった福光城の城主でした。系図①のように四代の経光の三男・経茂の流れとなります。島根県の西部いわゆる石見地方に拠点をおいたので、惣領家と区別するために石見吉川家と称されます。ところで、鳥取城の戦いは、そもそも室町幕府の將軍足利義昭が信長と対立し毛利領内に移ったことが発端となり、毛利輝元が義昭と共に京都へ上ろうとするのを信長が阻止する為に家臣の羽柴秀吉が毛利攻めを開始します。

天正五年(一五七七)から五年間、毛利領内を秀吉が攻めていきました。最後は和睦交渉に入り、毛利側から人質を二人だし、領土は一部割譲となります。ここで毛利一族は信長の後継者となった秀吉に従うことになるので、この戦いは大きな転換期でした。

経家は、鳥取城主・山名豊国が信長のもとへ逃げたので、吉川元春が城主の代わりとして選ばれました。

経家が家族にあてた遺言状には、日本を二分する戦いで死ぬことは名誉としていますが、死にたいだけ大規模な戦いであつたかが伺えます。

吉川氏の戦いの歴史のなかでも、経家の存在は大きく、吉川広家の前代人帳(功績のあった家臣名簿)では筆頭にその名が記されています。また、広家の兄・元長は、経家の父・経安を父親として仕え、経家の息子経実(亀寿丸)を自分の息子のように扱い、千石を与えたいという手紙を送っています。このことは実現できませんでした。元長の跡を継いだ広家は、慶長五年に岩国に移った時、経実を家老職にし、千石を与えました。

鳥取城の戦いとは、吉川氏に於いて伝えていくべき歴史ゆえ、経幹が関連の資料を書き写したのです。

(原田史子)